自分の姿を消す魔法とその顛末【修正版】

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自分の姿を消す魔法とその顛末【修正版】

【Ｎコード】
Ｎ３１５９Ｃ

【作者名】
谷津矢車

【あらすじ】
「僕」は影が薄い。街を歩いても、偶然人に出会わないほどに影の薄い僕は、自分が透明人間になる魔法にかかっているのだと言い訳をして生活をするようになる。自分から自己主張することなしに存在感を示せない「透明人間」だった僕は、あることをきっかけに「魔法」が解ける。・・・・・短編です。

僕は、自分の姿を消す魔法を使える。と、言い訳して、日々を送っていた。

僕は影が薄い。冗談抜きで薄い。

どの位薄いかと言えば、ばあちゃん家で出されるカルピスくらい薄い。いや、ばあちゃん家で出されるカルピスが必ずしも薄いわけではないが、イメージ、ってものがあるじゃないですか。ねえ？・・・・・・ねえ、と言われても困るだろうが。

もっと、具体例を挙げるべきだろう。

僕は、街で「偶然」人に会わない。

僕は小学校から現在に至るまで同じ街に住んでいるのだが、そういう場合、例えば駅なんかで旧友にばったり会って、子供の頃の思い出話に花を咲かせる、なんて光景、よくあるらしい。だけれども、僕にはそういったものが無い。駅で電車を待っている時も、地元のスーパーで買い物をしている時も、買っている所を見られるとちょっと気まずい本（要はエロ本）をコンビニで買っている場面でも、全く誰にも出会わない。

誤解の無いように言っておくが、僕は友達がいないわけではない。小学校にも中学校にも、高校にも大学にも、職場にだって友人はいる。そして、そういう友人とはそれなりの関係を結んでいる。だが、それらの友人とは、しっかりと待ち合わせをして会わないことには会えない。普通の人のように、「あれ？奇遇だねぇ！！」みたいな遭遇はしないのである。

多分、僕は街に溶け込むのが得意なんだろう。まるで、ジャングルに溶け込むハンターのように。だから、友人すら、僕とすれ違っても気づかないのだろう。

その結果が、「街で偶然人に会わない」。

その話を職場の同僚にしたことがある。その同僚は笑って言った。「僕は街を歩けば知り合いに当たるよ」って。それはそれですごいのではないか、と僕は思ったけれど、普通の人がどれくらいの頻度で偶然人と出会うかわからないので、なんとも言えなかった。

そんな僕は、ある言い訳を考えた。

それは、「僕は影が薄いんじゃなく、僕が『魔法』にかかっているせいなんだ」という、言い訳。「透明人間になってしまう魔法に、僕はかかっているんだ」という、言い訳。

僕は、透明人間なんだ。自分から働きかけることなしには、だれも僕には気づかない。

一億人がひしめき合うこの日本。僕はその中で蠢く、透明人間なんだ、って。

そんな「透明人間」は、ふと考える。

透明人間は透明人間で寂しくない。だって、自己主張さえすれば、皆に気づいてもらえるのだから。それは喩えるなら、透明人間がブルマを履いて、皆にイタズラするようなものだ。そうすれば、普通の人間は、ブルマが浮いている、というすごいシュールな光景を目撃できる。そして、カンのいい人間なら、それが透明人間の所業(しわざ)だ、ということに気づくだろう。透明人間は透明人間なりに、世間に存在感を示すことができるのだ。

だけど。

ブルマを脱いだ瞬間、透明人間は誰にも見えなくなる。いや、正確には、認識されなくなる。まるで、そこらへんに転がる塵芥(ちりあくた)のように。

透明人間は一方通行なんだ、と僕は思う。普通の人間は、世界とつながり、世界からも求められた、足場のしっかりした存在なのだ。

けれど、透明人間は・・・・・・。

「透明人間」は、こちらから求めれば世界とつながることが出来る。でも。世界は透明人間を求めてはくれない。そもそも、見えないものを求めるほど、世界は空想家ではないし、優しくもないのだ。

結局、「透明人間」は世界に食らいついて生きるしかない。世界を少し歪めて棲家を作り、世界に求めてもらおうと努力する。そうやって、なんとか世界とつながるしかない。
かつて透明人間だった僕は、少々病みながらも、そんな風に生きていた。

その日も僕は、街を歩いていた。
まるで真夏の海水浴場のように混み合った歩道を、僕は一人カツカツと歩く。街行く人も、まるでそこに何も無いような目で僕を見、すれ違う。透明人間の僕は、誰にも干渉することなく、歩道を抜けていく。
と・・・・・。
「あれ？カワジくん？」不意に僕を呼ぶ、キーの高い声。僕は思わず振り返った。
「あ！やっぱりカワジくんだ！」僕の視線の先には、モノトーンカラーのメイド服を着た女性が立っていた。大体年のころは僕と同じくらいだろうか。だが、僕の頭の中には、この女性に一致するメモリーは存在しなかった。要は、「全く記憶に無い」。
「あ！さては覚えてないな！？」メイド服の女性は、頬を膨らませた。どうでもいいが、年のころが僕とほぼ同じ、まあつまりは「いい年した」女性が頬を膨らませる、という図は、なかなか腹立たしいものだ。たとえそれが、美人であったとしても。
「ごめん・・・・・」僕は、頭をかいた。するとそのメイド服は、ニパっと屈託ない笑顔をして言った。
「ほら、小学校のとき一緒のクラスだった、サクマだよ」
ああ、サクマさん。ようやく、合点がいった。
たしか、小学校３～４年のときに同じクラスだった。だが、特に友達だったわけではないし、そもそも話したことがあったかさえ定かではない。
それからサクマは、自分の近況についてグダグダと語りだした。

別に、話せるのならば誰でも良かったのだろう。そういう空気を醸しながら、サクマは言葉を重ねる。
演劇を志してはいるものの、やっぱり厳しい世界なんだよね。食べていくのは大変なワケよ。そんなわけで、不本意だけど、こんなバイトしてる訳。と言って、サクマはメイド服のスカートをつまんでヒラヒラさせた。
サクマが持っているプラカードの上で踊る惹句から察するに、今流行りのメイドカフェ、というやつなのだろう。ま、メイド服を着ている時点で十中八九そう思っていたのだけれど。僕の視線に気づいたのか、サクマは言った。
「メイドカフェ、“クレッシェンド”、よろしくね！」　本来の呼び子としての仕事を思い出したのか、道行く人々にも声をかける。
「そういえば」サクマは少年みたいな笑みを湛えて、“クレッシェンド”って、どんどん強く、っていう音楽記号なんだよ、って教えてくれた。
そして、僕とサクマは別れた。僕の背中に、「どんどん強く」という願いがこもったメイドカフェの呼び子さんの、威勢のいい客引きの声が響いた。

魔法が、解けた気がした。
僕を包んでいた、「僕は誰にも覚えてもらえていない、気づいてもらえない」っていう魔法が。つまりは、僕は透明人間じゃなくなって、ようやく普通の人間になれた。
あの、メイド服の女の子が、僕の魔法を封じた。
おかげで僕は、世界と繋がれたんだ。
なんだか、安心できた。

僕は、自分の姿を消す魔法を使えた。だけれど、メイド服の女の子によって、その魔法を封じられてしまった。
そう思いつつ、日々を過ごしている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3159c/

自分の姿を消す魔法とその顛末【修正版】

2010年10月17日07時19分発行